

各関係機関の長
各病害虫防除員 殿

宮崎県病害虫防除・肥料検査センター所長

平成 2 1 年度病害虫発生予報第 9 号について

平成 2 1 年度病害虫発生予報第 9 号を発表したので送付します。

平成 2 1 年度病害虫発生予報第 9 号

向こう 1 か月間における農作物の主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。

発生予報の概要

作物名	病害虫名	発生量の 平年比	記載ページ
施設果菜類	病害全般	-	2
	タバココナジラミ類	-	2
冬春キュウリ	べと病	やや少	2
	うどんこ病	並	2
	褐斑病	やや少	3
	灰色かび病	並	3
	菌核病	並	3
	ミナミキイロアザミウマ	並	3
	病害虫全般	-	3
冬春ピーマン	斑点病	やや少	3
	うどんこ病	並	4
	菌核病	並	4
	アザミウマ類	やや多	4
	黒枯病	前年、前々年 より少ない	4
冬春トマト	葉かび病	並	5
	灰色かび病	やや多	5
	トマト黄化葉巻病 (TYLCV)	前年、前々年 より多い	5
	タバココナジラミ類	並	5
冬春イチゴ	うどんこ病	やや多	6
	アブラムシ類	並	6
	ハダニ類	やや少	6

作物の生育状況 (12月中旬)

12月中旬の冬春キュウリ、冬春ピーマン、冬春トマト、冬春イチゴはいずれも収穫期であった。

向こう 1 か月の気象予報

天気は平年と同様に晴れの日が多く、気温、降水量及び日照時間はいずれも平年並の確率 40% と予想されている。(1 か月予報 鹿児島地方気象台 12 月 18 日発表)

発生予報の根拠および防除対策

施設果菜類

1 病害全般

1か月予報によると、気温、降水量及び日照時間のいずれも平年並の確率40%と予想されていることから、状況によっては加温機が稼働しないこともあるので、気温の変化には細心の注意を払い、施設内の温湿度管理を徹底する。

また、コスト低減のため、夜温を低めに管理したりハウスサイドや内ホ口を多層被覆するなど様々な対策が取り組まれているところでは、施設内が多湿になりやすく、病害の発生が助長される傾向があるので特に注意する。

キュウリ：べと病、灰色かび病、菌核病、斑点細菌病など

ピーマン：灰色かび病、菌核病、斑点病、黒枯病など

トマト：疫病、灰色かび病、菌核病、葉かび病、すすかび病など

2 タバココナジラミ類（外、コナジラミ、イタイイ、Q、シルバーリーフコナジラミ）

[予報の根拠]

- (1) 冬春キュウリでのコナジラミ類の発生面積率45.0%（平年23.6%）は平年より多、100葉当たり虫数1.3頭（平年3.3頭）は平年並である。
- (2) 冬春ピーマンでの発生面積率6.7%（前年35.7%、前々年13.3%）、100葉当たり虫数0.3頭（前年2.2、前々年0.5頭）で、いずれも前年、前々年より少ない。
- (3) 冬春トマトでの発生面積率30.8%（平年32.4%）、100葉当たり虫数3.2頭（平年3.3頭）はいずれも平年並である。

[防除上の注意]

- (1) タバココナジラミ バイオタイプQとシルバーリーフコナジラミの形態上の差異は成虫、幼虫ともに確認されておらず、両種の肉眼での区別は困難である。
- (2) 防除対策については、トマトのタバココナジラミ類（5ページ）を参照のこと。

冬春キュウリ

1 ベと病（やや少）

[予報の根拠]

- (1) 12月中旬の発生面積率35.0%（平年61.8%）、発病葉率1.4%（平年11.1%）はいずれも平年より少である。

[防除上の注意]

- (1) 湿度が高いときには多発しやすく、多発すると防除が困難となるので予防散布に重点をおき、発生が見られたら初期防除を徹底する。
- (2) 窒素切れや草勢の衰えは発生を助長するので、肥料切れしないように適正な肥培管理に努める。

2 うどんこ病（並）

[予報の根拠]

- (1) 12月中旬の発生面積率35.0%（平年41.7%）は平年並、発病葉率1.8%（平年3.9%）は平年よりやや少である。

[防除上の注意]

- (1) 病勢が進展してからでは防除効果が低くなるので、発病を確認したら早めに防除する。
- (2) 薬剤耐性菌を生じやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。
- (3) 乾燥時に多発するので、ほ場が過乾燥にならないように管理に注意する。

3 褐斑病 (やや少)

[予報の根拠]

(1) 12月中旬の発生面積率5.0% (平年30.7%)、発病葉率0.3% (平年3.6%) はいずれも平年より少である。

[防除上の注意]

(1) 多発してからの防除は困難なので、初期防除を徹底する。

(2) 窒素質肥料の多用は発病を助長し、過繁茂になって通風を妨げるので適正な肥培管理に努める。

(3) 下葉の発病葉はほ場外に持ち出し処分する。

4 灰色かび病 (並)

[予報の根拠]

(1) 12月中旬の巡回調査では発生未確認である。(平年：発生面積率2.0%、発病葉率0.1%)

[防除上の注意]

(1) 曇雨天が続く時は、日中でも加温機を稼働させるなど除湿に努める。

(2) 発生初期の防除を徹底する。なお、薬剤耐性菌を生じやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

5 菌核病 (並)

[予報の根拠]

(1) 12月中旬の巡回調査では、20ほ場のうち1ほ場で微発生^(注)(発病果率0.5%未満)が確認されている。(平年：発生面積率7.6%、発病果率0.2%)

[防除上の注意]

(1) 曇雨天が続く時は、日中でも加温機を稼働させるなど除湿に努める。

6 ミナミキイロアザミウマ (並)

[予報の根拠]

(1) 12月中旬の巡回調査では、20ほ場のうち8ほ場で微発生^(注)(葉当たり虫数0.5頭未満)が確認されている。(平年：発生面積率4.7%、葉当たり虫数0.1%)

[防除上の注意]

(1) 多発してからは防除効果が低くなるので、低密度のうちに防除する。

7 病害虫全般(改植時の留意点)

[防除上の注意]

(1) ウイルス病を媒介するコナジラミ類やミナミキイロアザミウマに対しては、抜根する前の防除を徹底するとともに、抜根後は蒸し込み、少なくとも次作の定植まで7日程度の間隔を開ける。また定植時に粒剤を施用するなど次作の発生源を絶つように努める。

(2) 前作に褐斑病などの発生があった場合には特に注意し、定植後直ちに予防防除し感染を防ぐ。

冬春ピーマン

1 斑点病 (やや少)

[予報の根拠]

(1) 12月中旬の巡回調査では、15ほ場のうち2ほ場で微発生^(注)(発病葉率0.5%未満)が確認されている。(平年：発生面積率32.7%、発病葉率2.5%)

[防除上の注意]

(1) 多湿条件では、発病や病勢の進展が助長されるので除湿に努める。

(2) 病原菌が、植物体に侵入した後の防除効果は低いので予防散布を行う。

2 うどんこ病 (並)

[予報の根拠]

(1) 12月中旬の発生面積率53.4% (平年49.1%)、発病葉率6.0% (平年5.7%) はいずれも平年並である。

[防除上の注意]

(1) 乾燥した条件で発生しやすいので、過乾燥に注意する。

(2) 本病菌は組織内部に侵入して繁殖し、他の作物のうどんこ病のように白粉をふりかけたようにはならないので、葉裏を中心に観察し早期発見に努める。

(3) 病勢が進展してからでは防除効果が低いので、発病を確認したら早めに防除する。

(4) 上位葉への進展が見られるなど病徴の激しいほ場においては、1回散布では防除効果が現れにくいことがあるので、1週間間隔で2回以上の防除を実施する。

(5) 微生物農薬は予防的効果が主であり、特にダクト散布では散布ムラが生じやすいので、定期的に化学農薬も併用する。

3 菌核病 (並)

[予報の根拠]

(1) 12月中旬の巡回調査では、15ほ場のうち1ほ場で微発生^(注)(発病株率0.5%未満)が確認されている。(平年：発生面積率4.6%、発病株率0.1%)

[防除上の注意]

(1) 地表面の菌核からの胞子の飛散を防ぎ、ハウス内の湿度を下げるためにビニルマルチを行う。

4 アザミウマ類 (やや多)

[予報の根拠]

(1) 12月中旬のミナミキイロアザミウマの発生面積率60.0% (平年52.4%)、10花当たり寄生虫数2.7頭 (平年2.6頭) はいずれも平年並である。

(2) 12月中旬のヒラズハナアザミウマの発生面積率40.0% (平年29.0%) は平年並、10花当たり寄生虫数7.0頭 (平年2.5頭) は平年より多である。

[防除上の注意]

(1) 今作は特にヒラズハナアザミウマの発生が多く、生息密度が高まると被害が発生するので注意が必要である。

(2) ミナミキイロアザミウマは、10花当たりの寄生虫数が1頭から被害果が出始めるので、発見したら早めに防除する。

(3) 密度増加時には、薬剤散布後に発生(孵化、羽化)する幼虫・成虫に対しての追い打ち防除が必要である。

(4) 両アザミウマの薬剤感受性は異なるので、防除の際は使用する農薬に留意する。

(5) 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統薬剤の連用は避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布に努める。

(6) 被害の激しい茎葉・果実のハウス外への持ち出し、マルチ被覆、青色粘着板の設置により生息密度の低下を図る。

5 黒枯病 (前年、前々年より少ない)

[予報の根拠]

(1) 12月中旬の巡回調査では、発生を確認していない。

(発生面積率：前年21.4%、前々年33.3% 発病葉率：前年1.2%、前々年1.3%)

[防除上の注意]

(1) ほ場内が多湿条件にならないよう、排水を良好にするとともにマルチなどを行う。

(2) 被害茎葉、果実は伝染源となるので、ほ場外に持ち出し適切に処理する。

冬春トマト

1 葉かび病（並）

[予報の根拠]

- (1) 12月中旬の巡回調査では、13ほ場のうち1ほ場で微発生^(注)(発病葉率0.5%未満)が確認されている。(平年 : 発生面積率5.8%、発病葉率0.5%)

[防除上の注意]

- (1) 多湿条件で発生しやすいので、ハウスの換気を良くする。
(2) 発病初期の防除を徹底する。

2 灰色かび病（やや多）

[予報の根拠]

- (1) 12月中旬の発生面積率7.7% (平年3.4%)、発病葉率0.2% (平年0.2%) はいずれも平年よりやや多である。

[防除上の注意]

- (1) 日中の換気、夜間の保温を行い、曇雨天日には加温機の送風を作動させる等、結露防止に努める。
(2) 花卉の発病に注意し、初期防除を徹底する。なお、薬剤耐性菌を生じやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

3 トマト黄化葉巻病 (TYLCV) (前年、前々年より多い)

[予報の根拠]

- (1) 12月中旬の発生面積率15.4% (前年、前々年ともに0.0%)、発病株率0.9% (前年、前々年ともに0.0%) はいずれも前年、前々年より多い。

[防除上の注意]

- (1) タバココナジラミ類 (媒介虫) の防除を徹底する。
(2) 発病株は伝染源になるので、根ごと抜き取り、土中に埋めるかビニル袋に入れて枯れるまで密閉する。ウイルスは植物全体に存在しているので発病部位を除去しても伝染源になるため、必ず株全体を除去する。

4 タバココナジラミ類 (シハ¹-リー²コナジ³ラミ⁴、タハ⁵コナジ⁶ラミ⁷イタイ⁸Q) (並)

[予報の根拠]

- (1) 12月中旬の発生面積率30.8% (平年32.4%)、100葉当たり虫数3.2頭 (平年3.3頭) はいずれも平年並である。

[防除上の注意]

- (1) 施設開口部に防虫ネット (0.4mm目以下) を必ず設置するとともに、光反射マルチや近紫外線カットフィルム等の物理的防除手段を利用する。
(2) 黄色粘着トラップ等を設置し、タバココナジラミ類の早期発見に努めるとともに、栽培期間中を通して防除を徹底し、本虫の密度を抑制する。
(3) タバココナジラミバイオタイプQに効果のある殺虫剤が少ないことから、発見したら早めに防除し、薬剤散布後は防除効果に注意を払い、必要に応じて適宜追加防除を行う。
(4) 施設内外の雑草はコナジラミ類の寄主となるので除草を徹底する。また、施設内では栽培目的以外の不要な作物や観葉植物等は栽培しない。
(5) 有効な薬剤に対する抵抗性の発現を回避する観点から、同一系統薬剤の連用は極力避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を心がける。また、抵抗性発現の可能性が低い微生物農薬や、コナジラミ類を物理的に窒息死させる気門封鎖剤を防除体系に組み込む。

冬春イチゴ

1 うどんこ病 (やや多)

[予報の根拠]

(1) 12月中旬の葉での発生面積率50.0% (平年30.5%)、発病葉率6.9% (平年3.4%) はいずれも平年よりやや多である。

[防除上の注意]

(1) 葉裏に発生しやすいので早期発見に努め、初期防除を徹底する。

(2) 激しく発病すると防除効果が低くなるので、予防に重点をおき、発病後は散布間隔を短くするなど発病初期の防除を徹底する。

(3) 発病果など被害部は伝染源になるので、早めに取り除きほ場内に放置しない。

2 アブラムシ類 (並)

[予報の根拠]

(1) 12月中旬の発生面積率14.3% (平年23.0%) は平年並、寄生株率0.9% (平年2.8%) は平年よりやや少である。

[防除上の注意]

(1) 開花期に薬剤を使用する場合は十分注意し、ミツバチに影響の少ない薬剤を寄生株とその周辺に部分散布する。

(2) 株整理後の葉数が少なくなった時期に薬剤散布を行うと防除効果が高まる。茎葉繁茂時には散布圧を強めて、葉裏に良くかかるように散布する。

3 ハダニ類 (やや少)

[予報の根拠]

(1) 12月中旬の発生面積率21.4% (平年44.4%)、寄生株率0.9% (平年11.0%) はいずれも平年より少である。

[防除上の注意]

(1) 収穫期に寄生数が増加してからの防除は困難なので、低密度時から防除を徹底する。

(2) 株整理後の葉数が少なくなった時期に薬剤散布を行うと防除効果が高まる。茎葉繁茂時には散布圧を強めて、葉裏に良くかかるように散布する。

(3) 薬剤抵抗性が発達しやすいので、異なる系統の薬剤をローテーションで使用する。

(注) 微発生とは、生息が確認されるが発生面積として換算する基準値に達しない密度の発生状況をいう。

その他

- 1 農薬適用の有無などについては次のホームページで確認する。

日本植物防疫協会ホームページ <http://jppn.ne.jp>

農林水産省ホームページ <http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/>

農林水産消費安全技術センターホームページ

(旧 農薬検査所) <http://www.acis.famic.go.jp/>

- 2 農薬の使用に当たっては、農薬使用基準の遵守並びに危被害の発生防止に努める。
特に水質汚濁性農薬ベンゾエピン剤(商品名、マリックス乳剤、粒剤等)は使用しないこと。

- 3 発生量(程度)の区分

多い	(高い)	やや多いの外側10%の度数の入る幅
やや多い	(やや高い)	平年並の外側20%の度数の入る幅
平年並		平年値を中心として40%の度数の入る幅
やや少ない	(やや低い)	平年並の外側20%の度数の入る幅
少ない	(低い)	やや少ないの外側10%の度数の入る幅

(平年値は過去10年間の平均)

- 4 予察情報の種類

病虫害防除・肥料検査センターから発表する情報は次の5つです。

- (1) 予報・・・向こう1か月の発生状況を予測し、毎月25日前後に発表する。
- (2) 注意報・・・主要な病虫害の多発生が予想され、かつ早めに防除が必要な場合に発表する。
- (3) 警報・・・主要な病虫害の大発生が予想され、かつ緊急に防除が必要な場合に発表する。
- (4) 特殊報・・・県内で初めて発生を認めた病虫害がある時や、病虫害の発生様相が特異な時に発表する。
- (5) 防除情報・・・注意をうながす必要がある病虫害の発生状況や、各種の防除技術指導情報について随時発表する。

お知らせ

病虫害防除・肥料検査センターでは、ホームページで情報を提供しています。

ホームページアドレスは、<http://www.jppn.ne.jp/miyazaki/>です。

【文書取扱】

病虫害防除・肥料検査センター 生頼

TEL:0985-73-6670 FAX:0985-73-7499

E-mail: byogaichu-hiryo

@pref.miyazaki.lg.jp